

細野要齋著『尾張名家誌』訳注稿（二）

尾張名家誌研究会（主編）大島絵莉香・鬼頭孝佳、〔訳注〕

小崎智則・森翔大・服部寛風・張名揚・石丸羽菜

はじめに

本稿は、『尾張名家誌』の訳注稿である。凡例は前稿「尾張名家誌訳注稿」（『名古屋大学中国語学文学論集』第二十五輯二〇一二年 名古屋大学中国文学研究室 所収）を一部変更、また追加した。本稿では七名分の訳注を掲載し、次号以降も継続する予定である。なお、前稿同様、訳注の対象となる儒学者の順は、必ずしも『尾張名家誌』に従うものではない。

以下、凡例で新たに変更・追加した項目については、末尾

に「新」と付け加えた。

【凡例】

底本は愛知県西尾市岩瀬文庫蔵、細野要齋著『尾張名家誌』初編、二巻二冊 安政四（一八七五）年刊本を用いた。

本文についての凡例は以下である。

- ・ 本文の句読点は、原典に従う。
- ・ 字体は可能な限り原典に従う。
- ・ 割注は「」で示した。
- ・ 割注には句読点がないため、文意に則して附した。
- ・ 本文に一字ほどの空格のあった箇所は、□で表す。

- ・訓点の不鮮明な箇所は国立国会図書館本を用いて補ったが、注記しない場合がある。

- ・訓点の合字は開いた。(メーシテ 等)

書き下し文についての凡例は以下である。

- ・原則として古文仮名遣いとする。
- ・訓点の合字は開いて書き下した。
- ・本文にない句読点を加える場合があるが、注記しない。
- ・ルビは現代仮名遣いとする。
- ・割注は「」で示した。
- ・本文中の空格は、表記せずに書き下した。

語注についての凡例は以下である。

- ・見出しの番号の順序は、書き下し文の順序に従う。
- ・見出しは本文と表記を同じくするが、訓点は省く。

- ・『名古屋市史』は、(名古屋市役所著 名古屋市発行 一九一五〜一九一六年)を用いた。以下、編名のみ記す。〔新〕

- ・『名古屋叢書』は、校訂・復刻版の正編(名古屋市教育委員会編、愛知県郷土資料刊行会発行 一九八二〜一九八三年)

- ・続編(名古屋市教育委員会編、名古屋市教育委員会発行 一九六四〜一九七二年)を用いた。以下、巻数のみ記す。

〔新〕

- ・中国の経典・史書を挙げることがあるが、『尾張名家誌』と経書・支所の間に介在するテキストの存在を否定するものではない。〔新〕

また、固有名詞は書き下し文・語注・通釈に関わらず、原文に従う。〔新〕

なお、原本の複写と閲覧にご協力くださった西尾市岩瀬文庫に御礼申し上げます。

三、並河魯山

【本文】

並河健字德脩號「魯山」。通稱自晦〔居號釣耕軒〕。父芳菴以醫仕本府。兄曰意ト〔通稱芳菴〕。繼其業為法眼。魯山自幼銳志儒學。受業于堀杏菴。博涉經史。確信濂洛之說。精易及太極說。亦善醫。其名翹翹一時。與陳元贊唱酬。壯歲召為儒官。其說書抽要領於言表。不_{シモ}必拘_ラ末義。深愜_フ公意。日夜侍側眷顧甚渥。寶永庚寅十一月二十九日歿。享年八十二。終身不娶無嗣。墓在三河寺部守綱寺。

【書き下し文】

並河健、字は德脩、魯山と号す。通稱は自晦。〔居を釣耕軒と号す。〕父、芳菴〔1〕、医を以て本府に仕ふ。兄を意トと曰ふ。〔通稱は芳菴。〕其の業を継ぎて法眼と為る。魯山幼より、志を儒学に鋭し、業を堀杏菴〔2〕に受く。經史を博渉し、濂洛の説〔3〕を確信す。易及び太極の説〔4〕に精し。亦た医を善くす。其の名、一時に翹翹たり。陳元贊〔5〕と唱酬す。壯歲〔6〕、召されて儒官と為る。其の書を説く、要領を言表に抽き、必ずしも末義に拘らず。深く公〔7〕の意に愜

ふ。日夜側に侍す、眷顧甚だ渥し。宝永庚寅〔8〕十一月二十九日歿す。享年八十二。終身娶らず、嗣無し。墓は三河寺部守綱寺〔9〕に在り。

【語注】

〔1〕芳菴―並河芳菴（？）万治二（一六五九）年。初代尾張藩主義直に仕え、法眼（本来は僧位だが、中世以後僧に準じて与えられた医師の称号）となる。その子、意トも後を継いで法眼となった。

〔2〕堀杏菴―前稿「堀杏菴」参照。

〔3〕濂洛之說―濂は濂溪（湖南省を流れる河川であり、地名にちなんで号とした）すなわち周茂叔（周惇頤）を指し、洛は洛陽の人である程顥・程頤を指す。彼らの学問つまり宋学を称して濂洛の説という。

〔4〕易及太極說―陰陽の二元は万物の根源である太極から生ずるとする説。『易』繫辭伝に「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業」とあり、易の八卦の生成過程、ひいては天地万物の生成論を示すものであったが、漢代には陰陽思想と結び

つき、魏晉以降になると、老莊思想の生成論とも通じて解釈されるようになり、宋学においては理氣二元論の説明にも使われた。

〔5〕 陳元賛―次稿「陳元賛」参照。

〔6〕 壯歳―三十歳。或いは広く三十歳代を指す。『礼記』曲礼に「三十曰壯、有室」とある。

〔7〕 公―尾張藩の第三代藩主徳川綱誠を指すか。魯山は二代藩主光友に召されて儒官となり二百石を賜っている。

『士林浜回』また、世子であつた綱誠の侍読となっている。『名古屋市史』人物篇)

〔8〕 寶永庚寅―宝永七(一七一〇)年。

〔9〕 三河寺部守綱寺―真宗大谷派の寺。尾張藩主義直の御付家老として三河国寺部(豊田市寺部町)に居城した渡辺守綱(天文十一(一五四二)〜元和六(一六二〇)

年)の菩提寺として寛永二十(一六四四)年に創建された。

【現代語訳】

並河健、字は徳脩。魯山と号した。通称は自晦という。〔住居

を釣耕軒と号していた。〕父は芳菴といい、医師として尾張藩に仕えた。兄を意卜(通称は芳菴である)といった。父や兄の業を受け継いで、法眼の称を受け、医師となった。魯山は幼少より一心に儒学を学び、堀杏菴の教えを受けた。経史を広く学び、宋学こそを正しいものとして固く信じていた。とりわけ易や太極の説に精しかった。医にも長けていた。その当時たいへん高名であつた。陳元賛と詩文の応酬をしていた。三十歳代で召されて儒官となつた。書物を講じる際には言葉のうえに要点を抜き出して、必ずしも瑣末な意味には拘らなかつた。藩主光友に深く信頼され、昼夜を問わず近侍して、たいへん厚く目をかけられていた。宝永七年十一月二十九日に没した。享年八十二歳。終生独身で後継ぎはない。墓は三河国寺部(豊田市寺部町)の守綱寺(しゅこうじ)に存在している。

(小崎智則 記)

十一、小出侗齋

【本文】

小出敬近字巖眞號「侗齋」ト。通稱治平。某氏子。幼ニシテ而篤實温

謹。讀^レ書^マ不^レ倦。蓬山^{トシ}異^レ之^ヲ養^テ為^レ嗣^ト。後入^レ京^ニ見^ユ淺見綱齋^ニ〔名^ハ安正。〕。學成歸^テ家^ニ。從游^{スル}者盈^ツ門^ニ。元文戊午六月十二日歿。享年七十三葬^ニ于城南長榮寺^ニ。所^レ著^ス有^ニ朝鮮畧說^一。藏^ス于家^ニ。

【書き下し文】

小出敬迓、字は巖眞、侗齋と号す。通称は治平。某氏の子。幼にして篤実〔1〕、温謹〔2〕。書を読みて倦まず。蓬山〔3〕之を異とし、養ひて嗣と為す。後に京に入り、淺見綱齋〔名は安正。〕〔4〕に見ゆ。学、成りて家に帰す。從游〔5〕する者、門に盈つ。元文戊午〔6〕六月二十二日歿す。享年七十三。城南の長榮寺〔7〕に葬る。著す所、『朝鮮畧說』有り。家に藏す。

【語注】

- 〔1〕 篤実―情が厚く、実直なこと。
- 〔2〕 温謹―素直で慎み深いこと。
- 〔3〕 蓬山―前稿「小出蓬山」参照。
- 〔4〕 淺見綱齋―承応元（一六五二）〜正徳元（一七一二）

年。近江の人。名は安正。通称は重次郎。号は綱齋。

儒学者。初めは医者であつたが、永田養庵を介して關齋に入門する。『先哲叢談』では「砥行植節、社中其の右に出づる者無し」と評されており、佐藤直方・三宅尚齋とともに崎門の三傑と称された。しかし、後に關齋の神道説を不服とし、敬により自己を、義により自己の外を正す敬義内外説に反駁して破門となつた。關齋の死後、京都錦小路高倉西入に私塾錦陌講堂を開いた。朱子学の大義名分論を説き、尊王思想を主張した。その思想は幕末の水戸派志士などに大きな影響を与えた。著作には『靖献遺言』、『靖献遺言講義』、『忠士筆記』、『拘幽操附録』などがある。

- 〔5〕 從游―師につくために遠方に向向くこと。
- 〔6〕 元文戊午―元文三（一七三八）年。
- 〔7〕 長榮寺―前稿「小出永安」の注〔8〕参照。

【現代語訳】

小出敬迓、字は巖眞。侗齋と号した。通称は治平。某氏の子である。幼い頃から情が厚く、素直であつた。読書を怠るこ

とがなかった。蓬山は彼を非凡な人物であるとして、養つて後継とした。後に京に入り、浅見綱齋（名は安正。）に仕えた。学問を修めて家に帰った。従游する者が彼の門前にあふれた。元文三年六月二十二日に歿した。享年七十三歳。名古屋城の南の長榮寺に葬られた。著したものに、『朝鮮畧説』が有る。家に所蔵されている。

（森翔大 記）

十二、小出慎齋

【本文】

小出孝承號^ス「慎齋^ト」。通稱^ハ周八（居號^ニ「求放舍、又停車園^ト」）。種田氏^ノ子。侗齋^ヲ養^テ為^レ嗣^ト。慎齋專信^ス「浅見氏說^ヲ」。又好^ム詩^ヲ。有^二「晚唐風^ス」實曆己卯十月十三日歿^ス。享年三十九葬^ニ于先塋側^ニ。所^レ著^ス有^二「木屑^一」。「慎齋^ノ養子惟式、號^ニ千之齋^ト」。通稱^ハ務平。深信^ス「慎齋^ノ說^ヲ」。最耽^ル詩^ニ。天明戊申四月七日歿^ス。葬^ニ于城南法然寺^一。」

【書き下し文】

小出孝承、慎齋と号す。通称は周八（居を求放舍、又、停車

園と号す。）。種田氏（1）の子。侗齋（2）、養ひて嗣と為す。慎齋、専ら浅見氏（3）の説を信ず。又、詩を好む。晩唐の風（4）有り。宝曆己卯（5）十月十三日、歿す。享年三十九。先塋の側（6）に葬る。著す所、『木屑』有り。〔慎齋の養子惟式、千之齋と号す。通称は務平。深く慎齋の説を信ず。最も詩に耽る。天明戊申（7）四月七日、歿す。城南の法然寺（8）に葬る。〕

【語注】

〔1〕 種田氏―未詳。

〔2〕 侗齋―前掲「小出侗齋」参照。

〔3〕 浅見氏―小出慎齋の養父である小出侗齋は、浅見綱齋に師事した。しかしながら、『尾張名家誌』の「浅見氏」が、同人物を指すかについては待考。浅見綱齋の略伝は、前掲「小出侗齋」の注〔4〕参照。

〔4〕 晩唐風―晩唐とは、唐を初唐・盛唐・中唐・晩唐に区分したうちの最晩の時期を指す。この時代の詩は、艶情を詠じたものが多い。李商隱・杜牧らが著名である。

〔5〕 宝曆己卯―宝曆九（一七五九）年。

〔6〕先塋側―前稿「小出永安」の注〔8〕参照。長榮寺。

〔7〕天明戊申―天明八（一七八八）年。

〔8〕法然寺―淨土宗、西山派。法皇山と号す。名古屋市中

区。深空信立によって建立された。もとは熱田正覺寺

の末寺であつたが、明治十年頃に、栗生光明寺の末寺

に改められた。一説によると、元は妙鏡山法淨寺と号

した天台宗の寺院であつたが、後に淨土宗に改め、深

空信立によって再興、今の名になつたという。

（『名古屋市史』社寺編 参照）

【現代語訳】

小出孝承は、慎齋と号した。通称は周八〔居を求放舎、また

停車園と号した。〕。種田氏の子である。侗齋が彼を養つて後

継とした。慎齋はひたすらに浅見氏の説を信じた。また詩を

好み、彼の作つた詩には晩唐の氣風があつた。宝暦九年十月

十三日に歿した。享年三十九歳。先祖代々の墓の側に葬られ

た。著したものには、『木屑』がある。〔慎齋の養子、惟式は千

之齋と号した。通称は務平。深く慎齋の説を信じた。最も詩

に耽溺した。天明八年四月七日に歿した。名古屋城の南の法

然寺に葬られた。〕

（大島絵莉香 記）

十五、沖野南溟

【本文】

沖野孝寛號ニ南溟又大嶽^ト。通稱^ハ一郎左衛門。本府世臣也。

資性剛直。不^レ拘^ラニ細行^ニ。傲然^{トシテ}芥^ニ視^ス權貴^ヲ。學無^ニ常師^ノ。

讀書一過便^チ成^ス誦^ヲ。尤長^スニ詩賦^ニ。正徳中坐^{シテ}事落^{サル}レ職^ヲ。爾

後謝^ニ絶^シ賓客^ヲ。閉^レ戸讀^シ書。家産屢^ク空處^{シテ}之晏如也。享保

己亥六月歿^ス。享年三十六。私諡^{シテ}曰^ニ文毅先生^ト。

【書き下し文】

沖野孝寛、南溟〔1〕、又大嶽〔2〕と号す。通称は一郎左衛

門。本府の世臣〔3〕なり。資性〔4〕剛直〔5〕にして、

細行〔6〕に拘らず。傲然〔7〕として權貴〔8〕を芥視す

〔9〕。学、常の師無し〔10〕。書を読むに一過すれば〔1

1〕、便ち誦を成す〔12〕。尤も詩賦に長ず。正徳〔13〕

中、事に坐して、職を落とさる〔14〕。爾る後、賓客を謝絶

〔15〕し、戸を閉じ〔16〕、書を読む。家産〔17〕屢々

空し、之に処りて晏如〔18〕なり。享保己亥〔19〕六月歿す。享年三十六。私諡して〔20〕文毅先生と曰ふ。

【語注】

〔1〕南溟―南の大海。『莊子』逍遙遊「南冥者、天池也。」。

〔2〕大嶽―『春秋左氏傳』莊公二十二年〔杜預注〕「姜、大嶽之後也。〔姜姓之先、為堯四嶽。〕」。

〔3〕世臣―代々功績があつた古くから仕えている家臣。『孟子』梁惠王下「所謂故國者、非謂有喬之謂也、有世臣之謂也。」。『宋史』曾忠伝「我宋世臣也。」。

〔4〕資性―生まれながらの性格。『史記』魏其武安侯列伝「君侯資性喜善疾惡、方今善人譽君侯。」。

〔5〕剛直―氣が強く、実直なこと。『史記』魏其武安侯列伝「爲人剛直、使酒、不好面諛。」。『宋史』に「性剛直」として用例が多い。

〔6〕細行―細かな行い。『後漢書』王允伝「王宏、字長文、少有氣力、不拘細行。」。

〔7〕傲然―尊大なさま。『新唐書』韋陟伝「視僚黨瞽然。」。

〔8〕權貴―權勢を振るう高位の者。『漢書』杜欽伝「數言得

失、不事權貴。」。

〔9〕芥視―芥を見るように輕蔑すること。「君之視臣如土芥、則臣視君如寇讐。」。（『孟子』離婁下）

〔10〕學無常師―『後漢書』班固伝上「所學無常師。」。

〔11〕一過―通読する。『新唐書』后妃伝上「一過輒不忘。」。

〔12〕成誦―暗誦できるようになる。『宋史』劉恕伝「恕少頓悟、書過目即成誦。」。

〔13〕正徳―一七一―一七一六年。

〔14〕坐事落職―落職は罷免。『明史』陳諤伝「坐事落職。

仁宗卽位、遇赦當還故官。」。『明史』張振秀伝「坐事落飾歸。」。『潛研堂文集』答袁簡齋書「落職則爲罷免。」。具体的に連座した事件については待考。

〔15〕謝絶―拒否して断ること。『史記』儒林列伝「終身不出門、復謝絶賓客。」。

〔16〕閉戸讀書―閉じ籠もつて讀書する。『蒙求』孫敬閉戸「常閉戸讀書。睡則以繩繫頸。懸之梁上。」。

〔17〕家産―『陳書』張種伝・『南史』張種伝「家産屢空、終日晏然。」。

〔18〕晏如―安らかである様子。『漢書』揚雄伝上「家産不

過十金、乏無儋石之儲、晏如也。』『宋史』王希呂伝

「尋以言者落職、處之晏如。」

〔19〕享保己亥—享保三年（一七一八）。

〔20〕私諡—位が低いなどの理由から賜諡されず、門人などから諡を送られること。『金史』褚承亮伝「門人私諡曰、玄貞先生。』『明史』謀偉伝「門人私諡曰、清敏先生。」。

【現代語訳】

沖野孝寛は南溟、また大嶽と号した。通称は一郎左衛門であった。尾張藩の旧臣であった。生まれながらの性格は気が強くて実直で、瑣末なことに固執しなかった。彼は尊大で、権勢を振るう、高位の者を軽蔑していた。学問には決まった先生はいなかった。本を通読すれば、すらすら暗誦できた。とりわけ詩賦が得意だった。正徳年間ある事件に連座して、罷免された。その後、来訪者や門人との面会を拒んで、閉じ籠もって、読書して過ごした。家財は度々底を突いたが、その状況にあつても安らかであつた。享保三年六月に無くなった。享年三十六歳。門人らは諡を文毅先生とした。

（鬼頭孝佳 記）

十七、須賀亮齋

【本文】

須賀安貞^ス號^ス亮齋又玉潤^ト。通稱^ハ圖書〔初稱^ニ順次郎^ト〕。精齋^ノ子。為^レ人嚴格。不^ニ妄^リ發^レ言^ヲ。幼^{ニシテ}受^ニ濂洛學^ノ。寶曆甲戌為^ニ侍讀^ト。祇^ニ役^ス江戸^ニ。居^{ルコト}數月。會^ク父病。乞^レ暇歸省^ヲ。〔ママ〕日夜侍^ス湯藥^ニ。衣^ニ不^レ鮮^ヲ。帶^ヲ遂^ニ丁^ニ憂^ニ。哭泣盡^ス禮^ヲ。除^テ喪^ヲ乃^ニ襲^フ祿^ヲ。尋^テ為^ニ儒官^ト。數^ク加^ニ賜^ス祿^ヲ。文化甲子十月嬰^ル疾。猶^ニ以^ニ賦^シ詩^ヲ啜^ル茗^ヲ為^レ樂^ト。十一月二十九日晝端^ニ坐^シ正寢^ニ忽然^{トシテ}逝^ス。享年八十一葬^ニ于先塋^ノ側^ニ。

【書き下し文】

須賀安貞〔1〕、亮齋、又、玉潤と号す。通称は圖書〔初め順次郎と称す。〕。精齋〔2〕の子。人と為り嚴格〔3〕たり。妄りに言を發せず。幼にして濂洛の学を受く〔4〕。宝暦甲戌〔5〕侍読と為る〔6〕。江戸に祇役〔7〕す。居ること數月、會々^{たまたま}父病む。暇を乞ひて帰省し、日夜、湯藥に侍す。衣、帶を解

かず。遂に憂に^{あた}丁り〔8〕、哭泣〔9〕して礼を尽す。喪を除きて乃ち禄を襲ふ。尋^つぎて儒官と為る。数々^{しばしば}禄米を加賜す〔10〕。文化甲子〔11〕十月疾に^{めく}嬰る。猶ほ詩を賦し若〔12〕を啜るを以て樂と為す。十一月二十九日晚、正寝〔13〕に端坐〔14〕し、忽然として逝す。享年八十一、先塋の側に葬る〔15〕。

【語注】

〔1〕 須賀安貞―享保九（一七二五）―文化元（一八〇四）年。なお、『名古屋市史』人物編によれば、また澄心齋とも号した。

〔2〕 精齋―須賀精齋（元禄元（一六八八）―宝暦四（一七五四）年）。詳細は次稿に期す。

〔3〕 嚴格―厳めしくて慎み深い。『漢書』匡衡伝「正躬嚴格、臨衆之儀也。」

〔4〕 受濂洛學―「濂洛の学」については前掲「並河健」の注〔3〕参照。『恭軒先生門人牒』（名古屋市立鶴舞中央図書館所蔵本）には「須賀順次郎安貞」の名が見える。それによれば、かつて恭軒先生（吉見幸和、寛文

一三（一六七三）―宝暦一（一七六一）年。名古屋東照宮の祠官。正親町公通らに垂加神道を学んだ。）に師事したことが分かる。なお、『名古屋市史』人物編には「吉見幸和に従ひて神道を學ぶ」とある。

〔5〕 寶暦甲戌―宝暦四（一七五四）年。

〔6〕 為侍讀―「侍読」は主君の側に仕え、学問を教える者である。『名古屋市史』人物編には「寶暦四年の春、父に代わりて江戸に赴き、藩主宗勝に侍講す」と記されている。なお「凡侯家事あれば、命を承けて文を撰す、宗春、宗勝、宗睦三世の墓誌は皆亮齋の手に成る」とのこととも同書に見える。

〔7〕 祇役―大名の家臣が交替で江戸や大坂の屋敷に赴き、一定期間勤めること。勤番。

〔8〕 丁憂―父母の死去に遭う。

〔9〕 哭泣―声を出して泣く。『孝經』喪親章「擗踊哭泣、哀以送之。」

〔10〕 數加賜禄米―『名古屋市史』人物編には「除喪して俸十口を賜ひ、七年（筆者注：宝暦七（一七五七）年）二月儒官の命を受く、後數々禄米を加賜して、采地二

百石、廩米百石に至る、又第宅を賜ひ、恩遇頗る厚し」と記されている。

〔11〕文化甲子—文化元（一八〇四）年。

〔12〕茗—茶の異名。『茶經』—之源「其名一曰茶、二曰檟、

三曰藪、四曰茗、五曰荈。」

〔13〕正寢—政を執り行う正殿。

〔14〕端坐—正座。

〔15〕先塋側—『名古屋市史』人物編によれば、七寺に葬られたという。「七寺」の正式名称は稲園山正覚院長福寺で、現住所は名古屋市中区大須二—二八—五である。

【現代語訳】

須賀安貞、亮齋、または玉潤と号した。通称は圖書である（最初は順次郎と称されていた）。精齋の子である。厳かで慎み深く、思うままに発言をしなかった。幼い頃は宋学を受けた。宝暦四年に侍読となり、勤番で江戸に赴いた。そこに居て数か月が経ち、おりしも父が病氣になった。休暇を乞い願って帰省し、昼夜を問わず湯薬をもつて父のそば近くにひかえていた。不眠不休で看病したが、最終的に父が亡くなり、

泣いて礼を尽した。服喪期間が終わって禄を継ぎ、儒官となつた。何回も禄米を加え賜つたことがある。文化元年十月に病氣に罹つたが、それでも詩を賦し、茶を飲むことを楽しみとした。十一月二十九日の朝、正寢に端坐して突然亡くなつた。享年八十一歳。先祖のそばに葬られた。

（張名揚 記）

二十、千村夢澤

【本文】

千村良重^ハ字興臣^ス號夢澤^ト。通稱勘平。致仕^{シテ}稱潜夫^ト。幼而為井出氏^ノ養子^ト。後復^ス本氏^ニ。為人溫潤平和。好揚^{シテ}人善^ヲ。從遊^ス小出侗齋^ニ。後為伏見邸^ノ奉行^ト。在職^{ルコト}數十年未嘗有^テ失焉。以文學^ヲ著^ス名^ヲ。所著有蓬左詩歸^ニ。本府名士之詩經^ル刊者極少。慮^リ後世或泯滅^{セシコトヲ}。為上木^ニ以期^{スル}不朽^ニ者。一日防丘詩選^ト。一曰崑玉集^ト。安永癸巳二月十二日歿。享年八十葬^ニ于城南政秀寺^ニ。

【書き下し文】

千村良重〔1〕、字は興臣〔2〕、夢澤と号す。通称は勘平。致仕〔3〕して潜夫〔4〕と称す。幼にして井出氏〔5〕の養子と為る。後、本氏に復す。人と為り温潤平和〔6〕。好んで人の善を揚ぐ〔7〕。小出侗齋〔8〕に従遊す。後、伏見邸の奉行〔9〕と為る。職に在ること数十年、未だ嘗て失有らず。文学を以て名を著す。著す所、蓬左詩歸有り。本府名士の詩、刊を経る者極めて少し。後世或は泯滅せんことを慮り、為めに上木して以て不朽に期する者なり。一を防丘詩選と曰ふ。一を崑玉集と曰ふ。安永癸己〔10〕二月十二日歿す。享年八十、城南の政秀寺〔11〕に葬らる。

【語注】

〔1〕 千村良重―『名古屋叢書』第十五卷の市橋鐸氏の解説中に略伝が紹介されている。

〔2〕 興臣―夢澤の手になる『防丘詩選』（『名古屋叢書』第十五卷所収）はもとより、『士林泝洄』（一）（『名古屋叢書』続編第十七卷所収）でも字は鼎臣となっている。

『名古屋市史』学芸編は「名家誌に興臣に作る、恐らくは誤ならん」と指摘している。

〔3〕 致仕―役職を辞して引退すること。

〔4〕 潜夫―隠者のこと。

〔5〕 井出氏―井出重治の養子となる。（『士林泝洄』（一）

〔6〕 温潤平和―「温潤」は玉のあたたくうるおった様子をいう。『禮記』聘義「夫昔者、君子比德於玉焉。温潤而澤、仁也」

「平和」は人の性質を表す語として魏晉南北朝の正史に散見される。両方用いられている例としては『北齊書』袁聿修伝「聿修少平和温潤、素流之中、最有規檢」が挙げられる。

〔7〕 好揚人善―『魏書』皇后列伝「性恬素寡欲、喜怒不形於色、好揚人之善、隱人之過。」

〔8〕 小出侗齋―前掲「小出侗齋」を参照。

〔9〕 伏見邸奉行―伏見屋敷奉行のことを指すと考えられる。夢澤の職歴は以下の通り。（『士林泝洄』（一）

正徳三（一七一三）年 十月二十一日、馬廻となる

享保十二（一七二七）年 十月十日、伏見屋敷奉行

となる

享保十五（一七三〇）年 京都買物奉行となる

享保十七（一七三二）年 辞職して馬廻となる

元文四（一七三九）年 致仕

伏見邸とは、尾張藩の伏見屋敷のことである。後藤真

一氏によれば、伏見屋敷奉行は同屋敷に置かれた役職で、常駐である。京都買物奉行は錦小路の屋敷に置かれた役職で、非常駐であつた。（「京阪地域と尾張藩」

（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第一篇所収、

二〇〇一年）及び「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」

（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第五篇所収、

二〇一二年）

〔10〕安永癸己—安永二（一七七三）年。

〔11〕政秀寺—瑞雲山政秀寺。臨濟宗妙心寺派。愛知県名

古屋市中区にある。慶長十五（一六一〇）年に清洲か

ら今の地に移転した。（『名古屋市史』社寺編）

【現代語訳】

千村良重、字は興臣、寧澤と号した。通称は勘平。引退して

潜夫と称した。幼いころに井出氏の養子となつた。後にもと

の千村氏に復帰した。性格は温和であつた。好んで他人のよ

いところを称揚した。小出侗齋に従学した。後に、伏見屋敷

奉行となつた。数十年役職にあつたが、失敗がなかつた。文

芸でその名を知られた。著作には、『蓬左詩歸』がある。本府

の名士の詩は、刊行されるものが非常に少なかつた。後代に

ひよつとしたら滅んでしまうかもしれないということを憂え

て、そのために上梓してそれで永遠のものとなることに期待

したのである。一つを『防丘詩選』と言う。一つを『崑玉集』

と言う。安永二年二月十二日に亡くなった。享年八十歳、名

古屋城の南の政秀寺に葬られた。

（服部寛風 記）

二十五、關祖洲

【本文】

關弘字子光號祖洲。通稱安之進。美濃大垣人也。遠祖曰三

勝興。從三戸田氏於肥前島原役有戰功。子孫世仕大垣。

父曰勝智。祖洲為人質直。不_レ好阿諛。常閉_レ戸讀書。及_レ壯有_レ志。四方_ニ。乃_ニ以_テ母弟_ヲ為_レ嗣。東遊從_ニ荻生徂徠_ニ而學。又去_レ入_レ京。力學_{ルコト}。窺_レ國十年。人皆信_ニ敬_ス之。寛保壬戌始_テ來_ニ尾張_ニ講學。門人日進。名高_ニ一時_ニ。乃承_レ口命_ヲ登_ニ國校_ニ。講說累_ス歲。寶曆癸未賜_ニ月俸_ヲ。安永癸巳八月七日歿。享年七十五葬_ニ于城南天寧寺_ニ。

【書き下し文】

關弘、字は子光、祖洲と号す。通称は安之進。美濃大垣の人なり。遠祖を勝興〔1〕と曰ふ。戸田氏〔2〕に肥前島原の役〔3〕に従ふ、戦功有り。子孫、世々大垣に仕ふ。父を勝智と曰ふ。祖洲、人と為り質直〔5〕なり。阿諛を好まず〔6〕。常に戸を閉ぢ書を読む。壮に及びて四方に志有り〔7〕。乃ち母弟を以て嗣と為す。東遊して荻生徂徠〔8〕に従ひて学ぶ。又、去りて京に入り、力学して園を窺はざること〔9〕十年、人、皆、之を信敬す。寛保壬戌〔10〕、始めて尾張に来て学を講ず。門人、日に進む。名、一時に高し。乃ち命を承けて国校〔11〕に登り、講説、歳を累ぬ。宝曆癸未〔12〕、月俸を賜ふ〔13〕。安永癸巳〔14〕八月七日、歿す。享年七

十五、城南天寧寺〔15〕に葬る。

【語注】

〔1〕 勝興―関祖洲の墓銘「祖洲関先生墓」（名古屋市立鶴舞中央図書館蔵、細野要斎『碑叢』所収）には、「其先関三郎兵衛勝興」とある。「関三郎兵衛」は大垣藩士として、戸田氏鉄（天正四（一五七六）〜明暦元（一六五五）年）藩主期の「慶安四年辛卯正月改分限帳」（大垣市編『新修大垣市史』通史編一、一九六八年所収）に「中村金左衛門組」の「一百五拾石 関三郎兵衛」と記録されている。

〔2〕 戸田氏―寛永十二（一六三五）年に戸田氏鉄が大垣藩主就任以降、明治初年まで大垣藩主を務める家系。

〔3〕 肥前島原役―いわゆる島原・天草の乱。寛永十四（一六三七）〜寛永十五（一六三八）年に起きた肥前国島原・肥後国天草の農民による一揆である。当時の大垣藩主・戸田氏鉄は幕命を受けて出陣、戦功を挙げる。大垣藩の島原の乱に関する史料「大垣藩耶蘇征罰私記」（大垣市編『新修大垣市史』史料編一、一九六八年所

収)には「百五十石 関三郎兵衛」の名がある。

〔4〕勝智―前掲注〔1〕「祖洲関先生墓」には「関安左衛門勝知」とある。関安左衛門は、戸田氏定(明暦三(一六五七)〜享保十八(一七三三)年)藩主期の「正徳四年甲午正月十五日改分限帳」(大垣市編『新修大垣市史』通史編一、一九六八年所収)に「小原二兵衛組」の「一百五拾石 関安左衛門」とあり、大垣藩士として記録されている。

〔5〕質直―飾り気がなく、まっすぐである。『論語』顔淵篇「夫達也者、質直而好義、察言而覩色、慮以下人。」

〔6〕人為質直不好阿諛―千村鷺湖(享保十一(一二二六)

寛政二(一二九〇)年)「賀三祖洲関先生拜賜月俸

序」に、当時の人々が名声や利益を求めておもねりへつらっていたのに対し、祖洲は清廉かつ寡欲であったと述べられている。「先生廉而寡欲。其室屢空。或言予曰。關先生之於世也。可謂無其術者上^ニ也。凡今世無田禄之士非^シ下阿媚柄臣之門^ニ。交結鉅富之人^ニ。汲汲^ト釣^ル声利^ヲ者上^ニ。則不能^レ仰養^ニ父母^ヲ。俯^{シテ}毓^{ルコト}妻帑^上也。」(名古屋市立鶴舞中央図書館蔵、千村鷺湖

『自適園集二編』天明五(一七八五)年刊所収/合字は開いたが、その他の訓点原文ママ)

〔7〕常閉戸讀書―志四方―「常閉戸讀書」は、前掲「沖野南溟」の注〔16〕参照。

「志四方」は、天下に活躍しようという志。また尾張名家誌に先行する、前掲注〔1〕「祖洲関先生墓」には「退而讀書環堵之中」とあるが、『尾張名家誌』には「常閉戸讀書・及壯有志志四方」とある。また『宋史』列女伝序には両記述の傍線部が存在し、男子の「志四方」、女子の「環堵之中」という対照的な書かれ方をしている。『宋史』列女伝序「世道既降、教典非古、男子之志四方、猶可隆師親友以為善。女子生長環堵之中、能著美行垂於汗青、豈易得哉。」細野要齋が『尾張名家誌』を撰するにあたり、「祖洲関先生墓」における女子の「環堵之中」を男子の「志四方」に書き換えた、さらにそのベースが『宋史』にあったのではないかと考える。

〔8〕荻生徂徠―寛文六(一六六六)〜享保十三(一二二八)年、儒学者。中国古代の言語や制度の研究を重んじる古文辞学を提唱した。宝永六(一七〇九)年、江戸で

私塾・護園塾を開講、著述と教育に努めた。

〔9〕不窺園―庭先をうかがいみないほど勉学に励む。『漢書』

董仲舒伝「蓋三年不窺園、其精如此。」

〔10〕寛保壬戌―寛保二（一七四二）年。

〔11〕國校―尾張藩の学問所。巾下学問所を指すか。巾下学問所は明倫堂の前身であり、宝永元（一七四九）年に発足する。なお前掲注〔1〕「祖洲関先生墓」には「依命登于明倫堂」とあるが、明倫堂開講は祖洲没後の天明三（一七八三）年である。

〔12〕寶曆癸未―宝曆十三（一七六三）年。

〔13〕賜月俸―前掲注〔6〕「賀^{スル}三^{スル}拜^{スル}ニ賜祖洲関先生月俸^ヲ」序によると、月俸はわずか五口、祖洲の門人がまじめで慎み深く、飽きて怠けなかつた功績によつての下賜という。「賀^{スル}三祖洲関先生拜^{スル}ニ賜月俸^ヲ」「數日^{ニシテ}果^{シテ}有^レ命^ヲ。賜^フ二月俸五口^ヲ。以^テ勞^{ストナリ}下^ハ先生教^ニ誨^シ藩中^ノ生徒^ヲ。恂恂^{トシテ}不^レ倦^ム也。く夫月俸五口固^ニ微^シ矣。」

〔14〕安永癸巳―安永二（一七七三）年。

〔15〕天寧寺―曹洞宗の寺院。もと「圓徳院」として清須にあったが、慶長（一五九六―一六一五）年間に現在

地の名古屋市中区門前町に移転する。元文二（一七三

七）年に尾張藩七代藩主徳川宗春（元禄九（一六九六）

く明和元（一七六四）年）の次男の法号「圓徳院」を避諱して、現在の名に改称された。『名古屋市史』社

寺編）

【現代語訳】

關弘、字は子光、祖洲と号した。通称は安之進。美濃大垣の人である。何代も前の先祖は勝興といい、戸田氏の肥前島原の乱への出陣に付き従つて、戦功をあげた。子孫は代々大垣藩に仕えた。父は勝智という。祖洲の性格は飾り気がなくまっすぐで、媚びへつらうことを好まなかつた。いつも家に閉じ籠つて読書にふけていた。壮年になつて天下に活躍しようという大志を抱いた。そこで同腹の弟を跡取りにした。江戸へ遊学して荻生徂徠に師事して学んだ。さらに去つて入京し、十年ほど庭先もうかがいみないほど勉学に励んだ。人々は皆、祖洲を信頼し尊敬した。寛保二年、はじめて尾張に来て学問を講授した。門人は日増しに進歩し、当時に名高かつた。そこで命令を受けて尾張藩の学問所に出仕し、何年も講

義した。宝暦十三年、月俸を頂いた。安永二年八月七日に亡くなった。享年七十五歳、名古屋の城南の天寧寺に葬られた。

（石丸羽菜 記）

おわりに

本稿は、尾張名家誌研究会にて発表・検討が行われた原稿を基にしている。前稿同様、参加者名及びその所属を記す。

田中千寿

（名古屋大学非常勤講師）

小崎智則

（愛知教育大学非常勤講師）

以下、名古屋大学大学院文学研究科の大学院生
中国哲学研究室

張名揚

（博士課程後期課程三年）

鬼頭孝佳

（博士課程後期課程一年）

石丸羽菜

（博士課程前期課程一年）

服部寛風

（博士課程前期課程一年）

水野雅之

（博士課程前期課程一年）

日本文学研究室

森翔大

（博士課程前期課程一年）

中国文学研究室

大島絵莉香

（博士課程後期課程二年）